

DV被害女性と、被害経験のない成人のDVの知識と考え方に関する比較

須 賀 朋 子

酪農学園大学

Thinking Patterns that Leads to Domestic Violence (DV) and Knowledge of DV: Comparison Between Female DV Victim and Non-Victim Adults

Tomoko Suga

Rakuno Gakuen University

抄録

本研究では、DV被害女性104名と、非被害女性238名、非被害男性110名の3群間において「DVの学習経験」、「DVにつながる考え方」、「DVに関する知識」について統計学的手法を用いて比較検討を行った。

「DVの学習経験」ではDV被害女性の65.4%がDVの講習会を受けており、78.8%が本での学習経験があった。一方、非被害女性と非被害男性では、それぞれ、講習会は33.6%、25.5%、本での学習経験は35.3%、30.0%であり、DV被害女性と非被害女性・非被害男性間で統計学的な有意差がみられた。「DVにつながる考え方」10の調査項目中の、暴力についての項目「暴力を振られるのは振られる方にも原因がある」で、DV被害女性と非被害女性・非被害男性間に統計学的有意差がみられた。

「DVに関する知識」では、「DVは、怒りで、衝動的に起こるものではなく、暴力という方法を選んでいる」と「DVの本質は相手を支配することである」で、DV被害女性と、非被害女性・非被害男性間に統計学的有意差がみられた。また、他の質問項目ではDV被害女性との有意差に非被害女性と非被害男性で格差があり、性差が結果に影響を与えていた。

以上の結果から、DV被害者と非被害者の間には学習に関して有意な差があり、DVについての啓発を行う必要があることから、DVの予防啓発活動の必要があることが示唆された。

キーワード：ドメスティック・バイオレンス、DV被害女性、デートDV、DV予防啓発活動

Abstract

In this study, a survey of “learning experience of DV,” “thinking patterns that lead to DV,” and “knowledge of DV” was conducted among three groups (104 women who acknowledged that they were subjected to DV, 238 women who had not been subjected to DV, and 110 men who had not been subjected to DV). The results showed that 65.4 percent of women who acknowledged that they were subjected to DV had a learning experience of DV through lectures and books, only about 30 percent of women who had not been subjected to DV, men who had not been subjected to DV reported such a learning experience.

As for “thinking patterns that lead to DV,” women who had not been subjected to DV compared to women who acknowledged that they were subjected to DV was clear with regard to one out of ten items: “Part of the cause also lies among those who are subjected to violence.” The gap in knowledge levels can be filled by promoting learning.

These exercised an influence on the result of “knowledge of DV.” women who had not been subjected to DV, men who had not been subjected to DV were found to have a lower level of knowledge than women who acknowledged that they were subjected to DV with regard to “DV is not caused spontaneously by anger but it is a deliberate choice of violence” and “The essence of DV is to control the partner.”

The gap in knowledge levels can be filled by promoting learning, so there is a need to think about the preventive education.

Keywords: Domestic Violence, DV damaged women, Dating Violence, DV prevention activity

受付日：2017年6月1日 再受付日：2017年7月28日 受理日：2017年7月29日

I. はじめに

平成27年4月の内閣府の調査では、配偶者から「1度でもひどい暴力を受けたことがある」と答えた女性が20.3%、交際相手から「1度でもひどい暴力を受けたことがある」と答えた女性が19.1%と、およそ5人に1人がDV被害またはデートDV被害を受けていることが明らかとなった¹⁾。

日本でもDV被害女性に関する研究が少しずつ始まり、増井²⁾はDV被害女性が離婚を決心するまでの過程を質的調査から「決定的な底打ち」に至るまで決心をすることが難しいことを明らかにしている。森田ら³⁾はDV被害女性のタイプを「軽度暴力群」、「暴力巻き込まれ群」、「重度暴力群」の3つに分類し、3群の特徴を念頭に置いた対応の必要性を提案している。また辻ら⁴⁾は民間シェルターの調査から、DV被害女性と合わせて、DVは被害女性だけでなく、その子どもにも大きな精神的ダメージを与えることを報告し、子どもへのケアに重点をおくことが、暴力の連鎖を食い止めることにつながることを呼びかけている。

DV被害女性の研究は海外のさまざまな国でも報告されはじめ、トルコのIzmirli et al.⁵⁾は、南西トルコの既婚女性の67.7%が少なくとも1度はひどい暴力を夫、または元夫からうけたことがあると報告している。また、Coutinho et al.⁶⁾は、ポルトガルではDV被害を受けた女性の43.4%が妊娠中に暴力を受けていることを報告している。

DV被害女性への研究が多方面から進められていることを概観しながら、本研究は、被害女性と、その比較として、非被害女性、非被害男性の3群のDVの学習経験、DVにつながる考え方、DVに関する知識の、量的調査研究を行う。非被害男性や女性との比較を行うことにより、「DV被害を受けた」女性は、DVに対する、どのようなことに気づき、知識を持っているかを明らかにしていく。

II. 研究方法

1. 期間と対象

2013年10月から2015年8月にかけて、北海道、東京、神奈川、静岡、千葉、茨城、埼玉に住む、成人(20歳以上)452名に、機縁法で質問紙調査を行った。質問紙は1枚ずつ手渡しで配布し、無記名で封筒に入れて密封回収を行った。

対象者の内訳はDV被害(デートDV被害を含む)女性104名(平均年齢40.1歳)、非被害女性238名(平均年齢37.9歳)、非被害男性110名(平均年齢36.7歳)で、回答者の年齢構成は以下の通りである。(表1)

なお、本研究のDV被害女性とは、配偶者・元配偶者・恋人・元恋人から、暴力(身体的暴行、心理的攻撃、経済的圧迫、性的暴行)を受けた経験があることを、自分

表1 回答者の年齢構成

平均年齢 合計	被害女性		非被害女性		非被害男性	
	n	%	n	%	n	%
40.1	n=104		n=238		n=110	
20代	14	13.5	39	16.4	7	6.4
30代	22	21.2	60	25.2	52	47.2
40代	31	29.8	68	28.6	30	27.3
50代	22	21.2	55	23.1	13	11.8
60代	15	14.3	14	5.9	7	6.4
70代	0	0	2	0.8	1	0.9

自身で認めている女性を対象としている。

2. 質問紙の内容

1) DVについての学習経験

「1. DVの講習などを受けた経験」、「2. DVについての本などを読んだ経験」について、「有・無」の2件法で回答を求めた。

2) DVにつながる考え方(表2)

須賀ら⁷⁾が作成をした既存の質問紙で、DVに巻き込まれてしまう考え方をどのくらい持っているかを測定した。

3) DVに関する知識(表3)

須賀ら⁸⁾が作成をした既存の質問紙で、「DVとは何か」の知識を測定した。

表2 DVにつながる考え方 須賀ら(2013)

- *1. 暴力を振るわれるのは振るわれる方にも原因がある。
- *2. 好きな相手なら暴力を振るわれても許してあげるべきだ。
- 3. ひどい言葉や大声で怒鳴る事も暴力である。
- 4. 相手を脅すために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ。
- 5. 自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ。
- *6. 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ。
- *7. 男性は女性を常に、リードするべきだ。
- *8. 好きな人には嫌われたくないので意見を合わせる方が良い。
- *9. 好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ。
- 10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にもNoと言って良い。

そう思う4点、少しそう思う3点、あまりそう思わない2点、そう思わない1点

*逆転項目 そう思う1点、少しそう思う2点、あまりそう思わない3点、そう思わない4点

表3 DVに関する知識 須賀ら(2014)

- *1. DVは相手とのケンカが原因でおこる。
- *2. DVとは配偶者間で起こるものだけをいう。
- 3. DVは、恋人同士などの間でもおこる。
- *4. 女性から男性への暴力はDVではない。
- 5. DVは、怒りで、衝動的に起こるものではなく、暴力という方法を選んでいる。
- 6. DVの本質は相手を支配することである。
- 7. DV被害は、身近で誰にでも起こりうることである。
- 8. DVの加害者は暴力を振った後、謝ることもあるが再び暴力を振ることが多い。

そう思う4点、少しそう思う3点、あまりそう思わない2点、そう思わない1点

*逆転項目 そう思う1点、少しそう思う2点、あまりそう思わない3点、そう思わない4点

3. データの分析

「DVについての学習経験」は、被害女性、非被害女性、非被害男性の3群の比較をKruskal-Wallis検定、「DVにつながる考え方」、「DVに関する知識」は、被害女性、非被害女性、非被害男性の3群の比較を一元配置分散分析で行った。その後の検定として、Bonferroni法を用いて、多重比較を行った。なお、解析はIBM SPSS 22.0を使用し、危険率 $p=0.05$ 以下を統計学的有意差ありと判定した。

4. 倫理的配慮

研究を依頼する際には、事前に研究の目的、方法について文書と口頭で説明し、承諾を得られた後に、手渡しで行った。質問紙表紙に、研究の趣旨の説明を明記し、質問紙に答えるか否かは自分の意思で決めて良いことを記した。参加を辞退したことにより不利益を被ることのないこと、プライバシーの保護に細心の注意を払い、無記名で封筒に入れて提出すること、提出されたデータは研究目的以外には使用しないことを明記した。本研究は、筑波大学大学院医学医療系の医に関する倫理委員会、酪農学園大学 人に関する倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

1. DVについての学習経験

被害女性、非被害女性、非被害男性の3群に分けて、DVについての学習経験を尋ねたところ、「1. DVの講習を受けた経験」では、被害女性の65.4%が「有」と回答しているのに対して、非被害女性は33.6%、非被害男性は25.5%であった。しかし、被害を受けていなくても、およそ3人に1人の女性、およそ4人に1人の男性がDVについての講習などを受けていることが調査から明らかとなった。Kruskal-Wallis検定の結果、被害女性と、非被害男女の間で有意な差 ($p<.001$) がみられた。「2. DVについての本などを読んだ経験」では、被害女性の78.8%が「有」と回答しているのに対して、非被害女性は35.3%、非被害男性は30.0%であった。しかし、非被害男女の、およそ3人に1人がDVについての本などを読んだ経験があることが調査から明らかとなった。Kruskal-Wallis検定、その後、多重比較を行った結果、被害女性と非被害男性の間で有意な差 ($p<.001$)、被害

女性と非被害女性の間で有意な差 ($p<.001$) がみられた。(表4)

2. 「DVにつながる考え方」における比較

「DVにつながる考え方」の10項目の質問について、被害女性、非被害女性、非被害男性の3群の比較を行った。「1. 暴力を振るわれるのは振るわれる方にも原因がある」では、被害女性は、4点満点で 3.49 ± 0.81 と、「暴力を受ける側には原因がない」という正しい認識が強いが、非被害男性は 2.97 ± 0.97 、非被害女性は 3.19 ± 0.93 で、被害女性との間に、非被害女性 ($p<.05$)、非被害男性 ($p<.001$) と有意な差がみられた。

「2. 好きな相手なら、暴力を振るわれても許してあげるべきだ」では、非被害男性との間に、非被害女性 ($p<.01$)、被害女性 ($p<.001$) と有意な差がみられた。この結果から、女性は「好きな相手でも、暴力は許さない」という考えが強いが、非被害男性は、女性に比べて有意に、認識が低いことがわかった。

「3. ひどい言葉や大声で怒鳴ることも暴力である」では、3群の間で有意な差はみられず、4点満点のうち、被害女性は 3.57 ± 1.00 、非被害女性は 3.61 ± 0.87 、非被害男性は 3.60 ± 0.75 と高い値であった。このことから、成人は、「言葉での威嚇や中傷も暴力だ」という認識があることがわかった。

「4. 相手を脅すために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ」においても、3群の間で有意な差はみられず、4点満点のうち、被害女性は 3.63 ± 0.95 、非被害女性は 3.67 ± 0.81 、非被害男性は 3.67 ± 0.68 と高い値であった。

「5. 自分の考えを押し付けたり、無理強いするのは暴力だ」においても、3群の間で有意な差はみられず、4点満点のうち、被害女性は 3.44 ± 1.04 、非被害女性は 3.27 ± 0.90 、非被害男性は 3.14 ± 0.88 であった。

「6. 好きな相手に『いつも2人だけでいよう』と言われたら従うべきだ」では、非被害男性との間に、非被害女性 ($p<.05$)、被害女性 ($p<.01$) と有意な差がみられた。非被害男性は、女性と比べて、「好きな相手に『いつも2人だけでいよう』と言われたら従うべきだ」と、有意に思っていることが結果から明らかとなった。

「7. 男性は女性を常にリードするべきだ」においても、3群の間で有意な差はみられず、4点満点のうち、

表4 DVについての学習経験

	被害女性 n=104		非被害女性 n=238		非被害男性 n=110		p 値	多重比較
	n	%	n	%	n	%		
1. DVの講習などを受けた経験	有 68	65.4	有 80	33.6	有 28	25.5	***	非被女,非被男<被女***
	無 36	34.6	無 158	66.4	無 82	74.5		
2. DVについての本などを読んだ経験	有 82	78.8	有 84	35.3	有 33	30.0	***	非被女,非被男<被女***
	無 22	21.2	無 154	64.7	無 77	70.0		

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$, n.s.=not significant

被害女性は 3.51 ± 1.22 、非被害女性は 3.47 ± 0.95 、非被害男性は 3.21 ± 0.86 であった。

「8. 好きな人には、嫌われたくないので意見を合わせる方が良い」においても、3群の間で有意な差はみられず、4点満点のうち、被害女性は 3.50 ± 0.75 、非被害女性は 3.47 ± 0.73 、非被害男性は 3.27 ± 0.80 であった。

「9. 好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ」では、非被害男性との間に、非被害女性 ($p < .05$)、被害女性 ($p < .05$) と有意な差がみられた。非被害男性は、女性に比べて、「好きなら相手を最優先するべきだ」と、有意に思っていることが結果から明らかとなった。

「10. 自分が傷つけられることをされたら目上の人や好きな人にもNoと言って良い」では、非被害女性との間に、非被害男性 ($p < .05$)、被害女性 ($p < .05$) と有意な差がみられた。非被害女性は 3.67 ± 0.78 と高く、「自分が傷つけられることをされたらNoと言う」という考えが強いが、被害女性と、非被害男性は、目上の人や好きな人が相手だと、Noと言えない傾向にあることがわかった。(表5)

3. 「DVに関する知識」における比較

「DVに関する知識」の8項目の質問について、被害女性、非被害女性、非被害男性の3群の比較を行った。「1. DVは相手とのケンカが原因でおこる」では、被害女性は、4点満点で、平均 3.60 ± 0.73 と「DVは喧嘩の延長ではない」という正しい認識が強いが、非被害男性は 2.92 ± 0.95 と低く、非被害女性も 3.36 ± 0.80 と低かった。3群の間で、非被害男性は有意に低く、非被害女

性 ($p < .01$)、被害女性 ($p < .001$) と有意な差がみられた。また、非被害女性も被害女性に比べて有意に低かった ($p < .05$)。

「2. DVとは配偶者間で起こるものだけをいう」でも、被害女性は 3.94 ± 0.24 と、「DVは配偶者間以外でも起こる」という正しい認識が強いが、非被害男性、非被害女性の認識は、やや低かった。3群の間で、非被害男性は有意に低く、非被害女性 ($p < .01$)、被害女性 ($p < .001$) と有意な差がみられた。また、非被害女性も被害女性に比べて有意に低かった ($p < .05$)。

「3. DVは恋人同士などの間でもおこる」では3群の間で有意な差はみられず、被害女性は 3.83 ± 0.63 、非被害女性は 3.70 ± 0.76 、非被害男性は 3.62 ± 0.74 と高い値であった。このことから、多くの成人は、DVは恋人同士などの間でも起こるということを知っていることがわかった。

「4. 女性から男性への暴力はDVではない」では3群の間で有意な差はみられず、被害女性は 3.80 ± 0.59 、非被害女性は 3.76 ± 0.66 、非被害男性は 3.71 ± 0.64 と高い値であり、多くの成人が「女性から男性への暴力もDVである」ということを認識していることがわかった。

「5. DVは怒りで衝動的に起こるものではなく、暴力という方法を選んでいる」では、「怒って暴力をふるうのではなく、自分のストレスを発散するために難癖をつけて暴力という方法で威圧をしている」というDVの特有のパターンを、被害女性と、非被害女性 ($p < .01$)、非被害男性 ($p < .001$) との間で、有意な差がみられた。このことから被害を受けていない成人には、「DVは暴力を

表5 DVにつながる考え方 須賀ら (2013)

	被害女性 n=104		非被害女性 n=238		非被害男性 n=110		p値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
*1. 暴力を振るわれるのは振るわれる方にも原因がある。	3.49	0.81	3.19	0.93	2.97	0.97	***	被害女>非被害女*非被害男***
*2. 好きな相手なら、暴力を振るわれても許してあげるべきだ。	3.79	0.59	3.78	0.56	3.56	0.75	**	非被害男<非被害女**被害女*
3. ひどい言葉や、大声で怒鳴る事も暴力である。	3.57	1.00	3.61	0.87	3.60	0.75	n.s.	n.s.
4. 相手を脅すために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ。	3.63	0.95	3.67	0.81	3.67	0.68	n.s.	n.s.
5. 自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ。	3.44	1.04	3.27	0.90	3.14	0.88	n.s.	n.s.
*6. 好きな相手に「いつも2人だけでしよう」と言われたら従うべきだ。	3.78	0.58	3.63	0.68	3.45	0.71	**	非被害男<非被害女*被害女**
*7. 男性は女性を常に、リードするべきだ。	3.51	1.22	3.47	0.95	3.21	0.86	n.s.	n.s.
*8. 好きな人には嫌われたくないので意見を合わせる方が良い。	3.50	0.75	3.47	0.73	3.27	0.80	*	n.s.
*9. 好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ。	3.56	0.78	3.63	0.65	3.31	0.89	**	非被害男<非被害女*被害女*
10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にもNoと言って良い。	3.41	1.08	3.67	0.78	3.41	0.99	*	非被害女>非被害男*被害女*

平均値は4点満点

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$, n.s.=not significant

選んで、暴力を振るっている」ということが、理解されていないことがわかった。

「6. DVの本質は相手を支配することである」も、被害女性と、非被害女性 ($p<.001$)、非被害男性 ($p<.001$) との間で、有意な差がみられた。このことから被害を受けていない成人には、「支配をするために暴力を振ることがDVである」ということが、理解されていないことがわかった。

「7. DV被害は身近で誰にでも起こりうることである」では、被害女性と非被害男性の間で有意な差がみられた ($p<.05$)。被害女性と非被害女性の間では、有意な差はみられなかったことから、成人女性は「DV被害は身近で誰にでも起こりうることである」という危機感を持っているが、非被害男性には、危機感が低いことがわかった。

「8. DV加害者は暴力を振った後、謝ることもあるが再び暴力を振ることが多い」では3群で有意な差がみられ、非被害男性は、非被害女性 ($p<.01$)、被害女性 ($p<.001$) に比べて有意に、DVで起こる暴力のサイクルを知らないことがわかった。4点満点中、被害女性は 3.91 ± 0.43 、非被害女性は 3.90 ± 0.39 と、ほぼ、すべての成人女性が、暴力サイクルについて知っていることが明らかとなった。(表6)

IV. 考察

本研究では、配偶者・元配偶者・恋人・元恋人から、暴力(身体的暴行、心理的攻撃、経済的圧迫、性的暴行)を受けたことを、自分自身で認めているDV被害女性と、非被害女性、非被害男性の、知識と考え方の比較検討を行った。

DVの講習を受けた経験や、本などでの学習経験は、

被害をうけたことのない成人男女と比べて、有意に被害女性は学習経験率が高かったことから、「DV被害を受けている」と、自分自身で認識するまでの過程で、DVに関することを勉強したからこそ、認識ができたことが考えられる。しかし、非被害経験男女も、およそ3割がDVの講習や本などで勉強をした経験があることも見落とせない。被害経験がない人にDVの知識や考え方を啓蒙していくことにより、被害者や加害者を減らすことが可能であるだろう。そういう意味では、被害経験のない人のDVの学習経験者の割合を高めていくことが課題であると思われる。

DV被害を受けているにも関わらず、認識せず、耐え忍んでいた女性が、激しい暴力を受けたあと、相手が寝ているときに夫を殺してしまった事例が日本でも紹介されている。女性がひどい暴力をうけていても、殺した瞬間から、女性の立場は被害者から加害者に転じ、刑罰を軽減させるためには、正当防衛、または責任能力のハードルをクリアしなければならないことを、中谷ら⁹⁾は述べている。大惨事に至ることを防ぐためにも、非被害男女へのDVに関することの啓発は必要であるだろう。

表5の「DVにつながる考え方」の結果から特筆することは、非被害男女は、「暴力を振られるのは振られる方にも原因がある」と考えている人が、少なからず存在していることである。特に男性に、このような考え方の人が多いことが結果から明らかとなったことは、今後、男性へのDVに関する啓蒙活動が必要であると思われる。さらに「好きな相手なら、暴力を振られても許してあげるべきだ」も、非被害男性は、女性全般に比べて、有意に、そう思っていることが結果から明らかとなった。この質問に対しても、男性の暴力に対する考え方の甘さがみられる結果であったと思われる。

表6 DVに関する知識

	被害女性 n=104		非被害女性 n=238		非被害男性 n=110		p値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
*1. DVは相手とのケンカが原因でおこる。	3.60	0.73	3.36	0.80	2.92	0.95	***	非被男<非被女**被女*** 非被女<被女*
*2. DVとは配偶者間で起こるものだけをいう。	3.94	0.24	3.77	0.60	3.56	0.71	***	非被男<非被女**被女*** 非被女<被女*
3. DVは恋人同士などの間でもおこる。	3.83	0.63	3.70	0.76	3.62	0.74	n.s.	n.s.
*4. 女性から男性への暴力はDVではない。	3.80	0.59	3.76	0.66	3.71	0.64	n.s.	n.s.
5. DVは、怒りで、衝動的に起こるものではなく、暴力という方法を選んでいる。	3.30	1.03	2.83	1.05	2.72	1.01	***	被女>非被女**非被男***
6. DVの本質は相手を支配することである。	3.69	0.80	3.24	0.92	3.44	0.85	**	被女>非被女***非被男***
7. DV被害は、身近で誰にでも起こりうることである。	3.75	0.64	3.55	0.76	3.49	0.74	*	非被男<被女*
8. DVの加害者は暴力を振った後、謝ることもあるが再び暴力を振ることが多い。	3.91	0.43	3.90	0.39	3.60	0.70	***	非被男<非被女**被女***

平均値は4点満点

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$, n.s.=not significant

「好きな相手なら『いつも2人だけでいよう』と言われたら従うべきだ」と、「好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ」という項目においても、非被害男性は、女性全般に比べて、有意に、そう思っていることが結果から明らかとなった。これらの質問の結果から、男性が2人だけの関係を、女性全般に比べて、強く望んでいることが考えられる。

「自分が傷つけられることをされたら目上の人や好きな人にもNoと言ってもよい」において、非被害女性は、「No」と言えるが、被害女性と、非被害男性は、言えない傾向が有意にあることがわかったことから、女性においては、「No」が言える女性は、はじめからDVに巻き込まれにくいと考えて良いだろう。しかし暴力関係から「脱却」のプロセス行動にある女性は、徐々に、加害者の顔色を伺い、相手を怒らせないようにする」という行動をパワー転回で、脱却していくと、増井¹⁰⁾は述べている。男性においては、全般的に、目上や好きな人には、「No」が言えない傾向にあることが考えられる。男性の間で、このような考え方の連鎖を食い止めていく必要があると思われる。

表6の「DVに関する知識」では、非被害男性と、女性全般の間で、有意に知識の違いがあることが確認された。女性全般は、「DVはケンカが原因で起こることではないこと」、「配偶者間以外でもDVは起こること」、「加害者は暴力を振った後、謝ることもあるが、再び暴力を振ることが多いこと」を知っているが、非被害男性は、知らない人が多かった。この結果は、表4の非被害男性のDVに関する学習経験率の低さが原因として考えられる。また、非被害男女と、被害女性との間で有意な違いがみられた、「DVは暴力という方法を選んで起きていること」、「本質は相手を支配すること」という、深い内容の知識となると、DV被害女性の知識が統計的に高いことから、被害を受けたからこそ、DVが暴力という方法を選んでいくことと、本質は支配することであることに気づき、知識として定着したことが考えられる。

DVは、理不尽な暴力であることを、被害経験のない人たちにも広く知ってほしいと考える。これらの強い支配を伴った暴力関係から、離脱し、生活再生をしていくことは被害者にとって非常に難しく、「大丈夫を増やしていくしかない」が、時間もかかることである¹¹⁾。被害の深みに陥る前に、逃げることを援助するためには、深い知識を提供していく必要があると思われる。

本調査の自由意見のなかには、被害女性から、「配偶者、恋人の暴力に苦しんでいる人が少しでも救われることを願わずにはいられません。実体験から被害者のために何かできればと思う」、「日本の古い家庭生活が主に女の我慢の上になりたってきていました。未だにそれが当然と考える人たちも多くなります。夫婦、恋人の関係は対等であるべきとの考えを是非、若い人たちに伝えてほしい」、「未成年に対する予防教育は効果が大きいと聞いて

いるので、学校、自治体は是非、力を入れてほしい」など、若い時期からDVの本質を知っていた方がよいことや、学校や自治体が力を入れることの必要性が考えられる。

非被害男女の自由記述においても「DVの相談員をしていました。DVの概念がもっと若いときからわかっているといいと思う事がたびたびあった」、「DVについても学ぶことは大切だと思いますが、人としてどのような成長をしていけばDVに巻き込まれないのか知りたい」など、DV被害を受けていなくても、この問題を深く考え、関心をもっていることが記述の内容から考えられる。

V. 結論

被害女性と、非被害女性、非被害男性の3群のDVの学習経験、DVにつながる考え方、知識の比較を行った。被害女性はDVの講習経験が65.4%、本などを読んだ経験が78.8%であった。この結果から、情報提供の方法として、本などでの啓発が大事である。また、非被害男女も3割程度の学習経験があることが明らかとなった。

「DVに関する知識」を問う回答では、「DVは、怒りで、衝動的に起こるものではなく、暴力という方法を選んでいる」と「DVの本質は相手を支配することである」で、被害女性と、非被害男女の間で有意差があらわれた。

また「DVは相手とのケンカが原因でおこる」、「DVとは配偶者間で起こるものだけをいう」と「DVの加害者は暴力を振った後、謝ることもあるが、再び暴力を振ることが多い」で、非被害男性と、女性全般との間で有意差があらわれことから、理由を研究で進め、理由が明らかとなった時点で、男性へのDVに関する知識の啓発に努めていく必要がある。

「DVにつながる考え方」においては、被害女性と、非被害男女の間では、「暴力を振られるのは振られる方にも原因がある」で有意差がみられた。被害女性と非被害男女の間で、暴力の責任の所在の考え方が違う理由を、今後の研究で明らかにしていく必要がある。

謝 辞

本研究は、平成29年公益財団法人日本教育公務員弘済会本部奨励金の助成を受けました。公益財団法人日本教育公務員弘済会のご支援に深謝致します。

引用文献

- 1) 内閣府男女共同参画局. 平成26年度男女間における暴力に関する調査.
http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-va/w/chousa/h26_boryoku_cyousa.html
Accessed July 27, 2017.
- 2) 増井香名子. DV被害者は、いかにして暴力関係からの「脱却」を決意するのか—「決定的底打ち実感」

- に至るプロセスと「生き続けている自己」－. 社会福祉学. 52 (2) : 94-106, 2011.
- 3) 森田展彰, 片柳せつ子, 大谷保和. ドメスティック・バイオレンスの被害者のタイプ分類. アディクションと家族. 31(2) : 129-139, 2016.
 - 4) 辻 龍雄, 加登田恵子, 山根俊恵, 他. 民間シェルターの活動からみるドメスティック・バイオレンスの被害者とその子どもたちの支援における課題 (第二報)DV家庭の子どもたち. 日本セーフティプロモーション学会誌. 4(1) : 50-53, 2011.
 - 5) Izmirli G O, Sonmez Y & Sezik M. Prediction of domestic violence against married women in southwestern Turkey. International Journal of Gynecology and Obstetrics 127 : 288-292,2014.
 - 6) Coutinho E, Almeida JD, Chaves C, et al. Factors related to domestic violence in pregnant women. Social Behavioral Science. 171 : 1280-1287, 2015.
 - 7) 須賀朋子, 森田展彰, 斎藤環. 中学生のためのDV予防教育プログラム開発と効果研究. 思春期学. 31 (4) : 384-393, 2013.
 - 8) 須賀朋子, 森田展彰, 斎藤環. 思春期世代を教育する教員のDVの知識と予防教育への考え. 思春期学. 32(2) : 265-271, 2014.
 - 9) 中谷陽二, 伊藤きょう子. 被害者が加害者に変るときードメスティック・バイオレンスと司法精神医学ー. 臨床精神医学. 39(3) : 339-334, 2010.
 - 10) 増井香名子. パワー転回行動：DV被害者が暴力関係から「脱却」する行動のプロセスー当事者インタビューの分析よりー. 社会福祉学. 53(3) : 57-69, 2012.
 - 11) 増井香名子. 関係離脱後のDV被害者の生活再生プロセスーソーシャルワーク支援の位置づけの必要性ー. 社会福祉学. 57(2) : 29-42, 2016.